

南歐通信

旅

宮崎正夫



宮

崎

正

夫

道路會議を終へて後、柏林を中心にして、ハムブルグ・ドレスデン、ライプツヒ、等の主要都市を履訪し、又丁抹及瑞典へ數日の旅行を試み、十月十日住み馴れた柏林を後にマインツよりケルン迄のライン河下りを最後に獨逸と訣別し和蘭に入り、アムステルダム、ザイダーゼーの締切工事、ロツテルダム等を見て其月の十五日フツク・オブ・ホーランドからハーウィツチに渡り倫敦へ急行し、萬國動力會議大壇場執行委員會へ列席したのみで、二十一日には再びドーベー海峡を越えて巴里に至り、翌二十二日の終列車で巴里のリオン停車場を出發して瑞西へ向つたのであつた。

邦貨に換算して一夜の寢臺料金五十圓餘を投げるのは餘りに馬鹿／＼しいので一晩位と思ひ普通車に乗つたが幸ひ一室に二人丈けの乗客であつたから外套を被りスチイームも通つて居た事であつたし伸び／＼と長くなり知らぬ間にスイスの國境を通過して翌二十三日の午前八時三十分ゼネバに到着、自分の時計を見ると七時半なのに乗客が皆下車するのでやつと西歐時間と一時間違ふのに氣付き大あわてに荷物を纏め車を飛び出す拍子に何やらにカフスピボタンを引つかけちぎつてしまつた。驛の構内で税關の荷物の検査をうけゼネバ湖畔に出る。朝霧低く水面に迷ひ、湖の水

を集めて流れ出づるローヌ川のモンブラン橋上に立てば清冽水底の藻のゆらぐさえさだかに見え、霧の晴れ間を白鳥の遊戯する風情を一幅の畫面と暫しは時を忘れて佇む。ローヌ河で二分された市街の一半、緩い傾斜をして居る美しい町並を歩み、モンブラン橋の下流なるルツソーラ島に引き返し、ウイルソン河岸を逍遙して、今は我國に用も無き國際聯盟事務局の外廓を一めぐりする。僅か數時間の見物で驛に戻りルツエルンへの汽車に乗る。車窓ゼネバ湖を俯瞰すればなだらかな傾斜面には白聖赤斎の別荘點在し、山肌の綠草紅葉を交へて湖に迫り、湖上には低迷せる秋霞未だ晴れやらぬも、遙かに遠く、雲の上にモンブランの雄姿朧に浮ぶを見る。ベルンを過ぎ午後三時過ルツエルンに到着ホテルに小憩して日の暮るゝには間もあれば、自動車を轟り、山麓よりはフュニキユラー・カーにてディーツェベルグへ上る。明日登攀を試みやうとするリギ山に駆けたる眺めとしてクライネ・リギと稱せらるゝ湖畔の勝地である。暮色濃く遠寺の鐘と夕鴉の聲のみ幽寂の境に響いて見下す

湖畔點々灯の瞬き初むる頃、遊覧客他に一人もない車室に入りて山下を下る。

十月二十四日、ルツエルン湖（フィール・ワルド・ステツテルゼーを略して）畔の朝、澄み渡る秋空に曉雲さへ消えて、片影を痕せぬ好晴である。永河時代の遺跡を保存せられた魚介類の化石に、超歴史的の前代には此邊も海底であった事が知られる。十一時遊覧船に乗り湖の秋を探る。水を繞る山々の紅葉、碧い空と澄んだ水を區限つて鮮かに映ゆるあたり、岸に沿ふては迂餘曲折ながら何處迄も續くだライブウェイが一條の白線を畫く。唯、今は季節でないから自動車の數は少ない。正午湖畔ヴィツナウにて船を捨て齒輪車に乘換へる。此登山鐵道は一時間にして湖上を抜く千四百米、海拔二千米、高さこそさ程でないが、アルプスの展望に於て比類ない景勝の地たるリギ山塊の最高峰リギ・クルムへ着く。強い秋の陽に眩ゆく、映ゆる新雪を踏んで展望臺にたてば、ユングフラウ、アイデン、メンシユ、

ウエツターホルン、シェレツクホルン等四千米を抜く山々
棚引く霞を裾に虚空に躍り、見渡す眼の奥底に痛みを覺ゆ
る迄に銳いスカイラインを横さまに刻んで蜿蜒南の空に連
る。眼を落せば明鏡冷かに午日を含むフィール・ワルド・ス
テツテルゼー、リギの麓を巡り、ピレタス、シャイデツク
等の近い山と共に前景を作り一望神韻縹渺、更に首を翻せ
ばツーグゼー紺碧を湛え、立ち並ぶ湖畔の家並も指呼の裡
にあり、遠くチユーリツヒの邊り霞に煙つて陽光穩かに溶
けて動かず、此瞬間こそ私の今迄の歐洲旅行で自然より享
けた最大の感銘の一時であつた。

若き日の夢にやあらでまぼろしを

うつゝに見たりアルプスの山
感懷盡きず、雪に咲く高嶺の花の可憐なるを嚴影より手
折り名残を惜しみつゝ秋の日既に傾き初むる頃山を下る。

湖上に見る夕陽ビレタスの山背に落ちて紫深き山肌を中空
に残せば、湖心黃昏れてルツエルンの町の灯水に流るゝ風
情、わびしくも美し。其夜チユーリツヒへ向ふ。

二十五日、起き抜けにリマート河に沿ひて湖畔に至れば
霧深き湖上、鷗の聲のみ聞えて眺望空し。

霧深き湖の朝のしづもりを

あわただしくも鶯しき啼く

十時過の汽車にてミランへ向ふ。車中濃霧のとばりを剥
ぐ如く晴れゆく間を變幻する山容水色に興しつゝ行く程に
山高く雪ある處奇巖削立幾百仞なるを知らず、峠深く水あ
る處綠樹紅葉相錯りて秋陽に映ゆる。實に飽く無き眺が續
くのであつた。幾つかのループトンネルを越え、サンゴタ
ール隧道を潛り伊太利との國境の幽邃境コモ湖畔を過ぎて
ロムバルデア平原に入る。晴れ渡る空に午後の陽光溢れ、
頓に氣温も上昇して眼に肌に早くも南國の感が深くなる。

夏の海の碧に似たり空の色

ロムバルデアの秋は闌けしを

夕刻伊太利第二の都會ミランに入る。

北歐、西歐の陰鬱な天候に慣れると云ふよりは寧ろ諦め
させられて居た此頃、今度の旅行に出掛けてから連日の好

晴、而も碧く澄んだ空は秋と云ふに情熱的な光に漲り輝いて居るのは何よりも嬉しく心も明るくなるのであつた。

二十六日朝ミランの中心ピアザ・デル・デュオモに面しビツトリオ・エマヌエロ二世の記念塔を前にして建てられた巨大な寺院を見る。十四世紀に工を起し二百年を費して竣工したと云ふ恐ろしく氣の長い建築である。此處を振り出としてサンタマリア・デル・グラチエー、サンアムブロジオ等の名だたる寺、思ひの形刻に、デザインに美術館を見る如きシメテロ（墓地）其他著名の建物を一巡し、晝過ぎ此地をたつ。沿線ガルダ湖畔は水美しい幽寂境、車窓心を惹かれつゝ落陽紅きベニスに入る。

二十七日、水の都ベニスの大動脈グランド・カナルに沿ふリアルト橋畔に一夜を明す。アドリアチック海とは狭長な砂洲により遮ぎられた水淺き潟の中央にあるベニスの市街は約百二十の島から成り、陸とは二哩餘の橋で連絡されて居る。主要交通路たる運河の數百五十、是を結ぶに四百の橋を以てし、兩手を擴げて立てば道路の兩側の建物に届

く程の小路が運河と交錯してラビリնスを形成して居る有様は實に獨特の奇觀である。此迷路を傳ふてピアザ・サンマルコに至ればサンマルコ寺院、共和政府時代のデュカール宮殿、今は商店或は飯食店となつて居る昔の大守官邸等の豪壯な建物に取囲まれ、此處丈けは例外に大きい廣場に無數の鳩が群がつて居る。此廣場の一角に空に聳ゆる高いカムパニール（鐘樓）は新らしく建造されたものでエレベーターにて頂上に上り市街を大観する。

瓦赤きベニスの真晝水を越えて

中空に鳴る鐘の音を聞く

ゴンドラとモーターボートで運河を一巡りしてベニス見物を終へ、此夕フローレンスに入る。伊太利の生んだ三大藝術家レオナルド・ダヴィンチ、ミケランゼロ、ラファエル、不滅の神曲を草したダンテ、近くはマキアベリー、ガリレオ等の搖藍の地である丈けに此國文藝の古都である。恰もファシストの羅馬進軍記念日の前夜に當り、當時此地に於て殉難した三十餘志士の追悼祭が催されムツソリーニ

が羅馬から列席した後とて、町中何となき興奮に夜更け迄もざわめきは鎮まらなかつた。

翌二十八日、第十二回ファッシュスト羅馬進軍記念日に湧きかへる街は、隊伍を整へた黒襯衣に満ち、ヴィットリオ・エマヌエロ二世廣場の記念祭式場目掛けて雲集する。デュオモ寺院、カムバニール、パラゾベキオ、パラゾブチ、ウフィチ繪畫館等を外から見てアルノ河の古橋を歴めく急ぎの見物を終えて羅馬に向ふ。

暮色漸く野に満ち、落日の餘映淡き頃となれば、車窓に見る、丘の古城くづぼれて僅かに残る荒涼たる外廓を黒く茜色の空に刻んで居る。一帯の山川草木のたゞまひは、さらでだに寂しき秋の夕を、綿々たる懷古の情にあやしき迄心を攬き亂すのであつた。瞑想の一時を過し夜羅馬へ着く。驛前には水底に裝置される電燈の光を宿して夜空に散る噴水と星を取かこむ群像、流石に羅馬は美術の香高い都ではある。

興亡二千有餘年の歴史を近代文化に絶ひませて、そぞろ行客を夢心地に誘ふてやまぬは我エターナル・シティー羅馬である。限られた短かい時日に、餘りにも變轉の激しい盛衰の跡を辿り、夢を追ふ暇ない身とて翌二十九日は終日事務的乍ら遊覧自動車を利用して古跡の見物に飛びまわる。七つの丘の一つキリナールの宮殿より初めて、通り行く町筋の此處にも彼處にも古き由緒の跡残り、佛獨英三國語で説明するガイドの絶間無い舌の動きを早口で聞きとれぬいま／＼しさも手傳ふて人間の聲と思はれぬ様な變な氣持で聞いて居たのであつた。車を止めて見物した後急いでバスに乗せる案内者のかけ聲、ビツテ、ブリーズ、シリブブレー」と一まとめにして一行に投げかける。チベール河に懸るヴィットリオ・エマヌエロ橋を渡り、今は特別市制を布かれて居る法王廳所在地ヴァチカン市に入れば世界最大伽藍たるサンピエトロ寺院は圓形廻廊を巡らせる廣場を前にして其龐大なドームを現す。ヴァチカン宮殿の一廓を占むる博物館を一周して超國寶的の繪畫彫刻についてのみ説明を受けたが猶二時間近くを費したのであつた。午後

は紀元前に造られた當時羅馬外廓の城壁、アクエダクト、アビアンウエイの跡、サン・デオパンニ・ラテラノ、サンタマリア・マデオノレ等の伽藍、キリストの聖き血の痕を印せるスカラ・サンタ、ドミネ・クオーバ・ペヂス、サンカリスタスのカタコム、カラカルラ共同浴場、マルセルロ劇場、コロッセウム等の殘墟より一轉新らしき伊國統一記念塔を巡る。

三十日の朝、カムピドリオ丘上工科大學の一劃にヴィルグリオ・テスター博士を訪問して一時間許り會談後丘上に立つて羅馬の西北一面の展望を縱にする。カムピドリオに近いコロッセウムは數多い古跡のうちでも二千年の昔を最もイムプレツシブに語るものである事は何人も異議のない處であらう。此コロッセウムとピアザ・ベネチアを結ぶヴィア・デル・イムペロ（皇帝道路）は一兩年前に完成した新道路であつて二千年の時の隔りを見程渾然と一瞥に納め得る豪壯な展望は他に得られない偉觀である。暫くベネチア廣場を起點として此道路に従つて見よう。フオロ・イタ

リクムより伊國統一の英邁なる帝王ヴィットリオ・エマヌエロ二世記念の豪華な白堊の雄姿を右手に仰ぎ、左にはサンタマリア寺院及トライアノ帝のフォロ（フォーラム）が發掘された生々しい外壁と圓柱を残し礎石、階段の石等は散亂したまゝである。是に對して市役所及博物館の新建築あり、次でフォロ・ロマノ、フォロ・ネルバ、サンタマルチナ寺院、フォロ・ケーヴル、バシリカ・マクセンチウス等紀元前後の遺跡を通り、想を遠く二千年の昔に馳せつゝ行けば完成後日の浅い新しいアスファルト道路を疾走する自動車は遊覽客の亂れ勝ちの足どりを脅かす。此近代道路の終端に當るコロッセウムは小山の如く行手にたち塞り、豪快な中に亡び去りしものを弔ふ一沫の哀愁寂寥の念を禁じ得ない。是を右折すればコンスタンチン大帝の凱旋門よりバラチノ丘へ、左折すればエスキリン丘に至る。

此邊一帶の廢墟、新興兩様の建物の極端な對照が融然と何の矛盾も無く並んで居る妙な取合せには寧ろ一種の靈氣でも含むかとさへ思はる、魅力に引きづられていつ迄も足

の向く儘に低回顧望去るを忘れたのであつた。午後パンテオン神殿、サンタンデエロ城、ハドリアン帝の古墳、サンピエトロ寺院及びバチカン宮殿を再訪し、マルゲリタ橋を渡り、ピアザ・デル・ボボロ（人民廣場）より苔蒸す城廓に沿ひて市中を歩き廻る。巨松の茂つて居る日本大使館を訪ひ土木省への紹介を依頼して夕刻六時半、大使館よりの歸り道に役所を訪問する。歐洲一般にそうであるが殊に此國の晝休は長い。午後一時から四時迄休憩し四時から六時乃至七時迄が執務時間である。大使館の計らひで時間の餘裕も無い事であるし正式に訪問の手續を省略して電話で打合せをして貰ひ直接一人で土木省にカツップフエロ氏を訪ねる。其課内に私の覺束ない英語も獨逸語も了解してくれる者が一人も居ないので折角テーブルを前にして面と向ひ会ひ乍ら互に意味の通じない言葉を取りかはした後辛うじて日本大使館へ電話をかけて貰ふ事に成功し館員に電話で通譯の勞を執つて貰ひ折角引つかゝりをつけた事であるから明朝再會を約して去る。歐洲大陸殊に南歐は英語の勢力意

外に微弱にてホテル以外に役立たぬ事を知つた。此夜は雷鳴雷閃激しい夕立となる。
三十一日、夜來の雨は霽れたが雲猶早く千切れ飛ぶ。今朝は通譯を同伴して改めて土木省を訪問する。カツップフエロ氏の好意によりファツシスト政治十年の土木事業を記した政府の記念出版物を特に大臣の許可を得たから君に差上げると云ふて浩溌な書物を與へられた。時間が無いので僅か數十分乍ら自動車専用道路の大綱を聽き正午の汽車でナボリへ向ふ。

伊太利の鐵道は實に時間が不正確で驛名の標示も馴れない者には不明瞭である。驛には廣告許りペタ／＼書いてある。其課内に私の覺束ない英語も獨逸語も了解してくれる者が一人も居ないので折角テーブルを前にして面と向ひ会ひ乍ら互に意味の通じない言葉を取りかはした後辛うじて日本大使館へ電話をかけて貰ふ事に成功し館員に電話で通譯の勞を執つて貰ひ折角引つかゝりをつけた事であるからスへ寄る積りで車掌に頼んだし——或は頼んだ積りと云ふ方が適當かも知れぬ——同乗客も其を聞いて曲りなりにも

世間話をしたのに遂にフローレンス着の時誰も注意して呉れ無かつた爲發車後氣がついたが既に遅く羅馬迄運ばれたところとして居た程である。今日も時間表より大分遅れて通り過ぎたのではないかと案じた事が幾度か、ものゝ一時間も遅延してナポリへ着く、豫め電報を打つて置いた日本人

専問の案内者アントニオ爺さんの出迎をうけ、海岸に面したホテルへ落着く、海中に突出た島の上の古城を前にして晴れ渡つた夕の海の眺望は一人であつた。

夜海邊を散歩すれば風和かに、夜乍ら岸壁の裾には透き通る地中海の水ひた／＼と寄せるのが見え、長い竿を振りかざして糸を垂れて居る大公聖連が並んで居る。町を歩けば物乞ひの子供が後をつきまとひ、いかゞはしいガイドが下司な日本語を交へて誇ひかけるのはうるさい限りであった。

十一月一日、窓を開けば地中海の潮風爽かに、白き帆のヨット、二つ三つ朝の海に浮び、左手にはベスピオの噴煙ほの紅く曉の色にそみ南海の秋今日も冴え／＼と晴れ渡つた。

る。恰も故國の御彼岸と同じ様に國民舉つて墓参に出掛けた日とかで、見物すべき名勝舊蹟何れも鎖されて居る由にて半日は部屋にとぢ籠り、イージーチエアに凭り窓開け放つて海風の吹き入るに任かせ旅の疲を養ひ後半日は市内見物に漫歩する。

翌二日、アントニオ爺さんの案内にてボムペイ見物に出掛ける、今日はベスピオの山容一際秋空に冴えて、噴煙真直に上り、山裾と海の間オレンヂの色鮮かに實る邊を縫ふて走る電車にて三十分許りすれば廢都ボムペイに着く。屋蓋は失はれたるもの多きも、外壁、柱、床等は埋没當時の形骸を失はず、ホテル、酒場、公衆浴場、麵麪工場、商店、市場、劇場、住宅等推測せらるゝ證蹟明瞭なるものがある。鋪石道には二條の轍痕を深く印して狹い人道さえ兩側に設けられ給排水鐵管の锈びたるがあらわに見られる。發掘された限々を歩き廻る事數時間、最後に現在猶續いて發掘作業を行ふて居る箇所を見て、二千年前の都市文化施設を窺ひ、淫蕩放縱なボムペイ十萬の市民が歡樂の一夜生き乍ら

灰に埋つた跡を弔ふ。ベスピオの煙千古に絶えずして、苦
蒸す廢墟の眞晝物音一つなき靜けさである。

ベスピオの煙ますぐに上る見えて

廢都の眞晝白き蝶舞ふ

アントニオ持參の署名帳には、一週間の伊太利の旅で得
た印象を次の如き意味に記した。

一塊の土くれにも數千年の古き香ある伊太利の山河、

舊蹟は無限の魅力を秘めて居るが現在此國民よりは學
ぶべき何者も、愛着を感する何者をも得られない。今
は早く國境を離れ度いとさえ思ふ。唯、親切なアント
ニオ爺よ長く健在で日本人の友であれ。

ボムペイ見物を終りナボリに引返し夕刻の汽車に乗る。

三日、瑞西、伊太利の旅行を通じて十日間天候に恵ま
れ、南歐の秋を心ゆく迄味ひ伊太利を去るの日、空低く時

雨れて風冷かに旅の興味も頓に失はれたので、ゼノワ見物

もそこノヘにしてニースへ、唯此附近の海岸のエキゾティ

ックな景色は素莫たる旅の想を慰めて呉れるに充分であつ

た。

四日、モンテカルロに遊び國立賭博場を見る、山腹の急
傾斜が海に接する勾配面に建ち並ぶ白壁高樓の華麗な色彩
と地中海の明媚な風光を、慌しい旅に一くぎりをつけよう
と云ふ終近くの寛闊な、一面焦燥な氣持の中に、飽く迄味
ひ、美しい海岸に沿ふドライヴウェイを走らせてニースへ
歸る。

五日、南歐の旅に豫定した日限も盡きんとして居る今
日、恰も天候益險惡、荒れ模様とさへなつて來たのでマル
セーユへの車中心境一轉して豫定を覆へし、マルセーユモ
リオンも下車を見合せて一路巴里へと急ぐ。半月の旅の落
ちつかぬ心から、暫くの滞在を許される巴里へ着いて見れ
ば、同じく旅の空乍ら安住の地とも思はれ、今宵の夢は安
らかに、穏かであつた。

——十二月二十五日、クリスマスの朝

ニ ウ ヨ ー ク の 宿 に て —